
ぼくの五箇条

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくの不道楽

【コード】

N8556K

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

ぼくは生きることを決断した。ぼくを生かす、ぼくにしか適用されない思考を生み出す為の試行錯誤を繰り返しながら

前のバイトを辞めてから五ヶ月引き籠もって、もう季節が夏に変わっていて、練炭自殺は暑くて無理だからとか、自分に死なない理由付けまでしてどうにか生きようと望んでいることを認めたくなくて、それでも毎週の求人誌だけはかさず購入しているから、仕事しなきゃという苦痛は消えないまま、ぼくは先週面接希望の電話をした。

これから1時に家を出て、歩いて二十分もかからない場所へ行けば勝手に口が面接用に動いて、表情なんかも、いかにも真面目って顔して真剣にここで働きたいんですって演技をやって、そこを出た後に自分に嘘をついた罪悪感に苛まれ、また部屋に閉じこもって鬱になって後の時間は過ぎていくのも、何度も繰り返ししてきたことだから、怖くなんかないはずなのに、ぼくはまだ面接に行こうか、断わりの電話を入れようかで迷い中だった。

あと七分くらいは大丈夫。八分過ぎたら家を出ないと面接の時間にぎりぎりだ。でも走ったら八分でも間に合う。けど、こんな暑い中走りたくない。汗をかきたくない。いっそ連絡もなしにぶつちぎってやるうか。どうせたいしたバイトじゃないんだし、これくらいのだったら求人誌の他のページに似たようなのがあったはず。

先週の、電話をした時あった勢いが信じられないくらい、ぼくは怯えている。電話をした直後は働いている自分が想像できたのに、今じゃまた寝逃げしたほうがましだなんて考えている。この不安から逃れられるのなら、金なんかなくてもいいとさえ思える。またひもじい食生活になっても耐えられる。外に出て働くことの苦痛に比べたら空腹なんて楽なもんだ。この間なんて食パンを買いに行くかどうかで悩んだ拳句、結局いちごジャムをスプーンで二匙すくって昼と夜を済ませたんだから。

またぼくは行かなくていい理由ばかりを考え始めている。最近分

かつてきたことだけど、やらなければいけないことから逃げたい時のぼくはそうやって理論武装して自分にやらなくていいのだと言い聞かせている働きに、今まで行わなかった抵抗をしてやろうという気持ちが出てきた。

似たような状況で何度も同じ”逃げる”という選択をしてきて、同じような結果しか得られないでいたこれまでを省みて、少しは違う人生の展開というものを見たい、そうしないとこんなくだらないぼくの人生がこれ以上惨めになるような焦りから、ようやくぼくは自立について真剣に考え出していた。

誰かに頼らず行ける所まで生きていこう。そんな背水の陣で望んだはずの昨日までの決意は、あっさりとは破られつつあった。こんな中途半端な気持ちで面接したって落とされるに決まってるけど、行くだけ行こうかな、と投げやりな前向きさ？でぼくは部屋をでることにした。

ぼく以外の人間は皆ぼくを見ている。ぼくはつねに観察されていて、その為ぼくは下手な行動がとれず常に窮屈な思いをしながら生きていかなければならない。何で他人のことがそんなに気になるのか、ぼく以外の人間は周りを気にしすぎなんだよ。そんなにぼくのあら探しをして、ぼくを追いつめたいのか理解に苦しむ。

と、ぼくは本気でそう感じていたし、考えていた。少しだけ本を読んだ分賢くなったはずの現在のぼくは、過去の自分がいかに歪んだ思考で苦しんでいたのか客観視することが可能になり、それによってこんな考えには矯正をしなければならぬことが分かるので、そのための訓練として自分の中で、自分をよりよく生かす為の、自分ルールみたいなものを築き上げることにした。

それは思想とか宗教とかの生きる指針を示すようなものには違いないが、唯一つその思想も宗教も自分を幸せにする為だけにつくられるべき、自分にしか適用しない、自分の手によってしか完成をみないものでなければならぬということだ。したがってぼくには信

仰というものは必要のないものだ。ぼくが縋っていいのは自分で経験し築き上げたものだけで、ぼくは自分で自分をしつけるのだ。ぼくはもう死にたいなんて思わない。幸せを望むことを止めない精神力を持った、自分の理想を実現させる人間になる為の努力を惜しまない日々を送るのだ。

と意気込んでみたものの、面接場所のスーパーに早めについているのに、店の外で酷くなってきた動悸を堪えるのが精一杯で、やっぱり今日は面接をする日和ではないから、ここから店に断わりの電話を入れて、せっかく来たんだから、食料を買って今日のところはおとなしく引き籠もろうという結論に至っていた。

でも、それでは何も変わらないではないか、とりあえず入店しよう。まずは客を装いつつ店の雰囲気を観察して働いている人たちが良さ気だったら、優しそうな人を見つけて声をかけよう。

よし、まずはそこまでする目標にがんばろう。少しづつ成長をしていこう。これだって立派な成長だろう。前向きに生きてるよぼくはそこからさらに面接の時間を過ぎてからぼくはレジのおばさんに声をかけることに成功した。安売りの食パンをカゴにのせた状態ではあったけど。

レジのおばさんの後について事務所の二階に上がっていく間、やっぱり間違えましたとか適当に言い残して今日はその場を去ろうなんて考えている自分を必死になって、面接だけだから、落ち着こう、働くとかは一旦脇に置いて、とりあえず話を聞くだけだから、と自分が面接を受ける側だということさえ忘れ、何とか自分を奮い立たせ休憩室らしき部屋に通されるまでは辛抱できた。

ぼくの予想ではおっさんが出てきて、偉そうな態度と口の利き方で、値踏みするような視線でじろじろ観察されながら、おきまりのコースで質問攻めにされると思っていたら、案外若い人がぼくを手前のイスに座るよう促してきた。

「どうぞお掛け下さい。これから面接を行う店長の橋本です」

そう言われたような気がする。店長の名札を見たら吉岡と書かれていた。ぼくは相手の言葉が頭に入ってこないくらい緊張の極致で、店長が思っていたよりも若かったことに若干安心を覚えつつ、でもこの面接は駄目そうだと感じたのは、いつもより質問の回数が少ないためだ。経験上面接時間が短い時は落ちるパターンだったから、ぼくの隙だらけの履歴書を見ても当たり障りのないことばかりを訊かれ、いつもなら空白の期間を容赦なく突っ込まれるのにそれも無い。見た目で使えないと判断されたのだろうか。

「もし、うちで働いて貰うことになったらいつから来られますか？」

「明日から大丈夫です」

つい心にもないことを言ってしまったと後悔する。ええかっこしいのぼくは時々そういう受け答えをして後々悔やむことが多かった。そんなことをする原因は薄々解っているのだ。反射的に口が動く、この反射を修正することがこれからのぼくの課題だと強く自覚する。とりあえずこの場は面接に意欲的な求職者を演じよう。どうせ落とされるんだから適当なことを言っても大丈夫だろう。受かる気配

が全く感じられないし、この若い店長だっでもうくだけた口の訊き方になつてるから、ぼくも遠慮なく好き勝手答えてやるう。

面接が終わり階段を下りるぼくは気が大きくなつていて、もしここで働くことになつてもうまくやっていけそう、ここなら働いてもいいかな、とさえ思えるようになっていた。

店の外に出た途端、頭にかかつていた靄が晴れ、塞ぎ込む感覚も取れ、何も解決していないのに仕事の問題が片付いたような清々しい心地でいた。今日のところは古本屋によってまた自分の内面を見つめ直すきっかけをくれそうなものを探そうと考えた。仕事の話は今日はいいだろう。明日からまた仕事探しをがんばろう。でも、今週の求人誌には一通り目を通したし、もう他には働きたいと思えるところも見つからなかったから、また来週の求人誌が発売されるまでは、自由時間としよう。

そう決めてぼくはふらふらと人通りの多い場所へ歩いて行くことにした。交通機関を使わなくても大丈夫、少しくらい歩かなくては不健康だ。体にも適度な負荷を掛けてあげないと。

一人暮らしの部屋には四時頃には着いた。ペットボトルのお茶で一息入れながら携帯を開くと、見慣れない番号からの着信履歴があった。さっきのスーパーからのだ。ぼくの呼吸は苦しくなり、きつとこれは採用の連絡だ。断りの連絡なら早すぎる。いくらぼくのような人間にでもそんな礼を欠くような真似はしてこないだろうと思つたからだ。どうしよう。心の準備ができていない。まだ働く覚悟が足りないよな気がする。このまま返信せずに、いつそ着信拒否にしておいてやり過ぎそうか。困ったことになってきた。心臓が痛い。携帯を握るぼくの手が震えている。

面接先から再び連絡があるまでこちらから掛けなおすことも出来ずに、ぼくは着信に気づかなかつたふりをして面接の結果を聞いていた。予想通り採用だった。そしてできれば明日から来てほしいと言われたけど、ごによごによと言いつて、来週頭から働き出すことになった。別に用事もなかつたけど、いきなり働くななんて絶対に無理だと思った。大体半年くらい世間から隔離されたような暮らしをしていたぼくが今日面接できたこと自体が奇跡のようなものだ。今日の疲労感は相当なものだった。肉体と精神の回復には数日が必要だと思う。だからいきなりは働きたくない。ぼくは必死に求人誌を見返して条件を確認しながら、就業時間がここに書かれてある時間と違つたらどうしようか悩み始める自分に、どうして面接の時条件の確認をきちんとしなかったことも今までさんざん繰り返してきた失敗だったじゃないかと、自分の成長のなさを嘆き、初出勤までの日々を悶々と過ごした。

ぼくの仕事はスーパーの品だし作業だ。本当は夕方からのシフトを希望していたけど、仕事を覚えるまでの間朝からのシフトに入れさせられてしまった。そこも断ればよかったのに、どうしても出来ませんという一言が口から出てこなかつたから、自分で面接まで受けたその仕事をぼくは嫌々やってあげているんだという気分で行うことになった。

一人きりの部屋で考えるとそれがどれだけ歪んだ考え方が解るのだけど、その時は冷静に物事を考える余裕などなく、そこがまた問題なのだけど、どんな状況におかれても冷静さを失わない精神力がほしい。

でも誰かがくれるわけもないし、今までもそうだったように誰も自分を助けてくれるわけじゃないか。自分を救えるのは自分の

意思のただだと心に誓ったはずの決意をぼくはあっさり忘れている自分が嫌になる。壁に格言みたいにして貼り付けていつでも見返せるようにしておこうか。

朝の六時に店に着く。よく分からないうちからペットボトルの入った台車を引かされる。膝をついた格好で棚に並べ、今日あったばかりの、ぼくと変わらないくらいの年齢の男に怒鳴られながら丁寧に並べ直す。その時点ですでにぼくのやる気は最低で、今にでも逃げ出してしまうくらいなのを、ここで逃げたらまた同じことの繰り返しだ。せめて今日一日でもやり遂げよう。一日分のバイト代くらいは稼いでおこう。それでまた本でも買おう。それを楽しみにしてがんばろう。

そう言い聞かせてみても、一度失ったやる気が復活することはなく、その日のぼくはきつとすごく泣きそうな顔をしながら、嫌ですって感情を全身で表現したような行動をとっていたんだと思う。

何度もぼくは、「やる気あんのか？」って怒鳴られていたから。

ありません。とは答えられないのが余計に自分に嘘をついているみたいでさらに自己嫌悪まで起こり、ようやく仕事が終わった頃には今日で辞めるという固い決意ができあがっていた。

けど、面と向かって店長には言えずに、その日遅く携帯から電話をかけて店長に根気がないことをなじられつつ、それでも辞めますと伝え約半年ぶりのバイトを終わらせた。

来月に一日分の時給が振り込まれるらしいが、それまでの生活費を何とかしなくてはいけない最悪の状況を作り上げたことに腹が立ち、ぼくはやっぱり駄目人間なんだと痛感するしかほかにやることか思い浮かばず、狭い部屋で夜中中自分を責め続けていた。

ぼくの部屋には求人誌が何冊も積み上げられ、それらはテレビ台代わりになっでいて、ぼくがあぐらをかいたときに目線の高さがちよつどいいよつになつてゐる。お昼の再放送のドラマを他にやることがないから観てゐる間中、仕事のことを頭から離れない。こんなことならあのままバイトを続けていた方が良かったくらいだと後悔してゐる自分を呆れた顔でみてゐるもう一人の自分を画面に映す。

もう何回繰り返したのか分からないくらいの過ちなのに我慢できない自分が嫌になる。たつた一日で仕事の何が分かるというのだ。世間でよく言う、せめて三ヶ月くらいの我慢すら出来ないぼくは社会に適合できない不能者に違ひない。ぼくは働くために生まれてきてない、劣性の人間なんだ。

世の中の大勢の人達が楽しく働いてゐるわけではないということばくでも分かる。問題なのはそれでも同じ仕事を長く続けられてゐるといふ事実だ。どうしてぼくにはそれが出来ないのか、その自分と他人との違ひをぼくは知りたかつた。

求人誌を眺めるのも目が疲れてくるくらい何度も目を通し、それで二、三めぼしいところが見つければ上出来だ。大半は先週と同じ求人が並んでゐるだけで、もう二ヶ月以上も載せてゐるものもある。きつとそこはとんでもなく出入りが激しく待遇も悪い、最悪の職場なのだろう。以前そついうところで働いたことがあつたから、なんとなく想像がついた。

職場の人間はどうしようもないくらいクズな連中ばかりだつた。男は風俗かパチンコの話で一日を費やし、女は下卑た話が大好きで、恥じらいなんてとつくに捨ててしまつたよつなのばかり。

そんな職場に当時のぼくのような世間知らずが一人入つてきたら格好的になるのは当然のことだと今なら分かる。

けど、その当時のぼくは連中の他愛のない会話に馴染めず、いちいち馬鹿正直に反応して、ムキになって反論して、連中にめんどくさい奴と思われ遠ざけられ、正論ばかりを口にしてほんと今考えると付き合いづらい人間の代表みたいな奴だったと恥ずかしくなる。

世間が正論通りに動くのならば争いなんかは生まれえない。このたった一つの事実だけで全てが結論付けられるのに、ぼくは自分の思い通りにならないことに腹を立ててばかりで、いつも不愉快な顔をして生きていたように思う。

あの職場の連中をクズと言うのなら、彼らのことを嫌い、そう形容していたばくも同類だとは気づけなかったのは、やっぱりぼくが未熟な人間だったからだろう。他人を否定して自分の問題を解決しようとはせずに過ごしていたぼくは、自分のことを考えたくなくて他人の言動に執着して非難ばかりしていたようだ。

そのままにしておいたぼくの問題は今もぼくの胸の内にある。解消されないまま残っているこの問題は、ぼくが本気になって解決しようとしないうちに一生このままなのだろう。よく大人になっても子供のような態度をとる人がいるが、あれがまさしく近い将来のぼくになる。

そう考えると恐ろしくなり、以前よりも生き方について真剣に考えるようになった。よく本も読んだ。そう、今のぼくに足りないのは経験だと思う。なんでもいいから行動することだけが今一番必要なことだと分かっていたのに、たった一日でバイトを辞めた自分に嫌気がさす。

夕方になりぼくはページの端を折っていた箇所の求人を見て、もう遅いかなと思いつながら電話を入れて、明日面接をしてもらえるところになった。早くこんな一日を過ごさなくてもいいようになりたい。今度こそ一から出直した。

世の中は不況というけれど、ぼくみたいな若者は労働力としては、それなりに使い道があるらしく、それほど間を開けることなく次のアルバイト先が見つかった。

もちろん楽な仕事ではなかったが、人生をやり直したいと決意したぼくにとっては働く場所はどこでもよかった。必要ならば泊まりがけの仕事でも、経験を積むという名目でやるだけやってみる覚悟も持ったから。

今度の職場はビジネスホテルの夜勤業務で、間に仮眠の時間が三時間あり、深夜の時間帯は客の出入りはほとんどないから、対人関係の苦手なぼくでもなんとかやれそうだと思い面接を受けた。

夜勤は定年退職した男性が四人いて、一人が今月末で辞めるから、その穴埋めでぼくが入れたことを後から知った。面接をした日に働くことが決定したので、早急に次を探していたのだろう。

深夜のカウンターで元郵便局員のおじいさんと二人つきりになる。おじいさんは細かい指示をしてくれず、すぐに仮眠室へ籠もってしまった。一人でカウンターからロビーを通してエレベーターをぼんやりと見ていると、いきなり扉が開いて中からゾンビが出てきてホテル内はパニックになって、客や従業員が無差別に喰い殺されていくなんて妄想をしている自分に気がつき、またかと反省する。

ぼくは何か嫌なことから逃げたいと思う時には、決まってあり得ない出来事を妄想してしまう癖があった。大抵はしたくない事から必然的に逃げてもいいという展開を作り上げるのだけど、それはあまりにも極端な出来事ばかりを想像してしまうことに、問題の根があると感じるのだった。

例えば、働いている職場に強盗がやってきて仕事どころではなくなるとか、ぼくが突然誰かに銃で撃たれ、病院に運ばれ命は取り留めたけどしばらくは職場復帰は無理で、堂々と仕事をしなくてもい

い状況になるとかの、本当に子供じみた空想をしてしまう。

それは子供の頃から続いている悪習みたいなもので、そういう妄想に浸っているときによくミスを犯し、さらにその場に居づらくなり、早く帰りたいと焦る気持ちが余計に妄想を強くするといった具合だった。

その日もまだ半分の時間も経たないうちからその場にいるのが嫌になり、どうにかして早く帰れないものかと、いつの間にか妄想に浸っているぼくに、おじいさんが交代にやってきて、ぼくは仮眠室に着いたはいいけど、ベッドは汚く、毛布だつてあのおじいさんのぬくもりが残っていて、線香みたいな臭いに混じって加齢臭までしていたから、とても眠れるような環境じゃなかった。

仕方ないから、備え付けのイスに腰掛けた状態のまま眠ることにした。こんな仕事するんじゃないかった。人に会わなくていいけど、環境が良くない。自分には合わない。もっとちゃんとした職場じゃないと長くは続けられない。

そう考えがいつものごとく向かう先を見つけているのを、ぼくは強引に別の流れへと向かわせるべく、働きたくない思考へ移行している自分をはつきりと意識するのだった。

どこで働いたって不自由なことはある。今までがそうだっただろう。それでも長く続けられた職場だつてあつたはず。思い出せ。その職場だつて、嫌なことはあつた。これはいつものことなんだ。特別な事じゃない。大丈夫、慣れたらそんなには苦にならなくなる。今までの経験で学んだことじゃないか、せめてあと一週間やってみよう。

幼い自分に言い聞かせる、少しだけ大人になった自分を想像しながら、ぼくはぼくの中にある幼児性と向き合い、優しく諭してやる行為を繰り返していた。

一日働くだけでこれだけ自分に気を遣わなければ、そこに居ることすら困難になってしまうぼくは、間違いなくなんかの病気なんだと思えてならない。

でも、少しづつやっていくしかない。どれだけの時間を必要とすれば、普通を手にすることが出来るのか分からないけど、一年でも二年でも、いや五年、十年、それ以上でもぼくはそうやって、自分の再教育を続けていく覚悟をしたはずだったのに、またすぐに忘れてしまうので、やっぱり紙に書いて貼っておくかな、と自分の覚悟の程度に恥ずかしくなってしまうのだった。

その職場で二ヶ月働いた後、ぼくは正社員になる為に仕事を辞めた。きつかけは同僚のおじいさんとの会話で、いつものごとく説教めいたことを言われたからだだった。

いつまでもこんなところで働いてはいけない、ちゃんとした仕事に就いて嫁を見つけて子供を育てて云々の決まり文句を言われ、それでぼくの気持ちは萎えてしまい、もうこの職場に居たくないという決心が固まると、もう一日でも早く辞めたいという思いで、仕事も手に着かない始末。結局逃げ出したことに違いはなく、また一からのスタートになってしまった。

そして今、ぼくはハローワークに来ている。求人閲覧時間をオーバーしていることを知らせる文字が画面上に流れているけど、隣の人も、その隣の人も席を立とうとはしていない。ぼくはそのことに罪悪感を覚えながらも閲覧を止めなかった。四十分粘って二件選び紹介状を貰うために窓口に並んだ。

ハローワークに来たのは一年前ぶりだった。去年の今頃も同じように真つ当な人生を送ろうと意気込み好みの求人が見つからず挫折したことを思い出すと、たった一年で事態がいい方向に転んでいると考える方がどうかしている。去年も今年も相変わらず不況という言葉が世間では飛び交っているではないか。そんな中どうしてぼくの周りだけが都合のいいようになるだろうか。楽天的すぎる気がする。これも甘えの一種なのだろうか。

結局ハローワークでは一件の紹介状しか貰えなかった。条件のいい求人には応募者が多数で、ぼくはそれだけで気落ちしてしまった。職員のおじいさんもぼくの経歴を見て勧めようとはしなかったし、もう一件の方はぼくを含めて三人しか応募してなかったから、これならばくにだって望みがありそうだと考えていた。

でも、自分の部屋で一人になるとどうしても自信が失われてくる。

ぼくは争うことが苦手だから、そういっただれかと一つのイスを奪い合うようなことに自分が関わっているんだと思うとすぐにそこから居なくなってしまう。争うくらいならそのイスを誰かに譲った方がましだという考えに気持ちが悪くなる。

この考えをそのままにしておく、いつものパターンだと面接自体をぶつちぎるだろう。それでは何も成長していないことになる。バイトすら長続きしないこの状況で、と思うと嫌になるけど、ぼくはまだ人生をあきらめたわけではない。駄目ならまたやり直せばいいことだ。やり直すといっても人生の経験がゼロになるわけではないから、多少前とは考え方の方向性も違っているはずだ。

そう、ちよつとづつの前進。実感できるほどの前進ではないけど、諦めなければぼくは前に向かってはいるはずだ、と自分を奮い立たせ、履歴書を埋めようと必死に頭をひねらせていた。

面接では相変わらずの口ごもり具合で、何度繰り返しても面接に慣れるということはなかった。顔を引きつらせながら面接官の質問に答えていた自分を思い返すと妙な自責を覚えてしまう。でも自分を責める理由など一つもないことは理解できている分以前よりは後悔は少ない。

そして一週間後採用の連絡を受ける。入社までの一週間という準備期間でぼくは目一杯の悪い想像をし、初出勤の日が来るのをこの夜の終わりが来ることのように恐れ、治まりつつあった睡眠障害がぶり返してきた。その間外出するのが怖くなり、仕事に必要な物を揃える為以外には買い物もしない日々を送っていた。

そして初出社の日、ぼくは前日までひたすら練習していたネクタイの結び方をうまく出来なくて、ぎりぎりまで部屋から出ることが出来なかった。

後にして思えば、それはぼくがいかに入社したくないかが分かる行為だったかが窺える。ネクタイをうまく結べてしまえばぼくは会社に行かなくてはならないから、無意識にネクタイをうまく結ばな

かつただけのことなんだ。

でも、それが理解できるようになるにはそれからさらに苦しみの日々を過ごした後のことなのだけねど。

デパートで買った一着一万円で購入したスーツと革靴に、三千元で見つけた鞆には電卓と筆箱。正社員で働いたことのないぼくにはそれくらいの準備しか出来なかった。なにしろ自分がそこで働いている姿を想像することが出来ないのだから。

一応内勤で採用されたはずなのだが、面接でもいまち自分の役割が把握できなかったけど、とりあえず服装に関しては二回確認したからそれで間違いはないはずだった。

それでもぼくはもしこの服装が周りと比べてひとり浮いていたらなんて考えてしまい、また部屋から出られずに入社しようか止めようかと、そわそわしながら狭い部屋を行ったり来たり悩んでいた。

広告代理店 確かにそう書いてあった。だけど、面接で向かった雑居ビルの三階にはぼくの期待を裏切る光景があった。

そこは風俗雑誌に載せる広告主を探す営業がメインの、ぼくのよくな世間知らずが初めて正社員として働くには相応しくないようなところだと思った。けど、そんなところでしかぼくのような人間は雇ってはもらえないという卑屈な感情が相変わらずぼくの心の大部分を占めているのも事実で、何をそんなに自己否定ばかりするのかと自分自身に言っていてやりたいが、いやもう何度も言ってるのだけど、ぼくのような社会不適合者は真つ当な仕事をしてはいけないんだ、なんて言葉を投げつけている時間は、ぼくを安心させることも、これまた事実だった。

目的のビルまで来たはいいけど、足がすくんで動けない。過呼吸のような状態になり、それでもぼくはパニックを起こさずにいられるのは何度も経験済みだからで、たぶん本当のパニック状態ではないのだろう。ぼくの場合は逃避行動の表れがそれなんだと思う。このまま会社へ行っても会社の人達に迷惑かけるだけだと自分を納得させる嘘をつき、向かう先を駅へと変えた。

帰りの電車の中で次第に冷静になっていく呼吸と精神状態に嫌気がさす。嫌なところから遠ざかるだけですぐに良くなるこの症状を他人に話せばまず間違いなく仮病と一周されるだろう。

どうやってこれを一般の人に理解できるように話せばいいのか、精神科の先生にならずに解ってもらえるのに世間の人にはどうしても怠けにしか受け取って貰えない。

ぼくは会社の人達を勝手に想像して彼らに頭を下げ、そう言い訳する自分を思い浮かべ精神の安定を図っていた。そしてそんなことを飽きもせず逃げの理由にする自分に見切りをつけてやりたいけど、死ぬことからさえ逃げてしまいたい、本当に臆病者の自分を目の当たりにするために、あの薄暗い独りの部屋に帰ろうとしているだけだった。あの誓いはなんだったのか、引きこもりやニートってこうやってどんどん社会に出て行けないようになっていくのかな、と悲観しても現実はまだ後悔するだけの明日を連れてくるだけなのに、ほんのちよつと希望を持つ自分がいるのもまた頭にくる。

ふと思いい立ち、行き先を変え寄り道をしようという気持ちになり、今日から働く予定だった会社に電話をいれ、風邪をひいてしまい欠勤の連絡をするのが遅くなったと嘘をついた。

すごく怒られ、社会人としての自覚のなさや、無断欠勤がどれだけ会社の人間に迷惑をかけるか等、今までさんざん言われてきた文句を今回も繰り返されるのかと構えていたのが、驚くほどあっさり受け入れられた。明日来られるかを聞かれ返事をする、社長の合田さんはあっさり電話を切ってしまった。そういう会社だから人の出入りが激しいのだろうと考えた。長く続かず、人が止めていく職場をぼくも何度か経験していた。そういうところで生き残れるのは神経の図太い人間だけで、決まって彼らは性格が大きく歪んでいる変人ばかりだった。ぼくはその変人の一人である、二年前の職場で出会った最悪のおっさんのことを思い出した。

まだぼくが本格的に精神を病んでしまう前段階にとどめを刺してくれたあの汚く卑怯なおやじ

その職場での、ぼくの役割はレジ打ちだった。在学中に出来る唯一のバイトがそれだったからだ。夕方からのシフトだったので学業には問題はなかったけど、夏休みに入る直前に店長から勤務先を変わってくれと頼まれたのがきっかけだった。

その頃のぼくは頼まれると断れない、というか単に断わるのが怖かったからほとんど無言のまま承諾するようなことが多く、結果いろんな仕事をいろんな人達に押し付けられるという悲惨な立場にあった。

夏休みの間だけという約束でレジ打ちから精肉で働くことになった。そこでの僕の役割はパック詰めがほとんどで職場のおばさん連中とも休憩室で顔見知りだったからすぐに人間関係は苦にならなくなった。

働き始めて二週間過ぎた頃、精肉部長の下についている古株の倉木さんという四十五歳になる小柄なおじさんの悪いうわさを聞くことが多くなっていた。

その倉木さんは前の職場でパートの女に手を出して職場をクビになったという問題のある社員らしく、でも当初はとても人当たりが良くなれない職場であたふたしていたぼくにいろいろ助言をくれたので、ぼくは人のうわさなんて当てにならないものだとして捨てておいた。

一ヶ月過ぎてようやくもとのレジ打ちに戻れると思っていたぼくに、店長から年末までこのままでいてくれと頼まれたときはつきりと断れば倉木さんとも表面だけの付き合いで済んでいたのにと思うと本当に後悔が残る。

夕方精肉の作業場裏からでてくる倉木さんを見て声をかけようかと近づこうとしたら、凄い形相で倉木さんがこちらを睨みつけてきた。戸惑ったぼくはそのまま素知らぬふりを決め込みそのまま帰っ

て行った。

次の日精肉部長さんがパートさんと肉の在庫が足りないと話をしてた。ぼくは倉木さんの持ってた段ボールにうちに出入りする業者の名前があったことを仕事終わりに部長さんに話した。

部長さんは驚きもせず、やっぱりか、と頭をかいた。以前にも倉木さんは店の肉を持ち出して別の業者に売ったりしているという前科持ちであることを部長さんは今更のように話していて、でもこの職場ではまだ証拠をつかませないからどうにも動きようがないのだと面倒そうに言った。

そのことは店長もその上の人達もすでに知っていて、ならどうしてクビにしないのかとぼくが訊くと、労基法を盾に裁判沙汰も厭わないという気構えらしく、証拠がない現在では名誉毀損で逆にこちらが訴えられかねないという輩やからだと部長さんは苦々しい表情で教えてくれた。

「そんなことしたら職場に居づらくなりませんか？　ぼくだったら絶対辞めるけどな」

世の中にな、面の皮がものすごく厚くちょっとやそつとじゃ動じない人間が実在するんだよ。おまえにはまだ分らないかもな。

部長さんは倉木さんのことをそれでも使い続けるしかないと半分諦めているらしかった。

それからしばらくして、倉木さんに呼び出されたぼくは“あの日のことを訊かれることになり、まだ子供だったぼくは馬鹿正直に正義感を振りかざし、つい倉木さんに説教めいたことを言ってしまった。

そこから倉木さんのぼくに対する嫌がらせが始まることになるのだった。

ぼくの名札が刻まれてゴミ箱に捨てられ、シフトが前日に変わったこととの連絡が誰からも来なかった。部長さんに訊いたら倉木さんがぼくに連絡を入れるといったらしいが、本人はあっけらかんとして「わりい」と一言。

制服が休憩に言っていた間にゴミ箱に落ちていたこともあった。仕事のミスがいつの間にかぼくのせいになされていたり、それらの全てに証拠があるわけではなかった。ぼくは毎日のように半信半疑で仕事をしていた。

そしていつの間にか変な被害妄想までするようになった頃は、精神科にお世話になるところまで症状は悪化していた。

ぼくが仕事を辞める日、倉木さんはなにもなかったかのように、「残念だな。せつかくいい後輩が出来て喜んでただけだな。勉強がんばれよ」

そういつて叩かれた肩には彼の嘲笑が込められていたように感じ、その場でぼくは悔し涙をこぼしてしまった。人前で泣いたのはその時が初めてだった。パートのおばちゃん達が、バイトを辞めるくらいで泣くことないのと笑ってくれたが、それすらもぼくを嘲笑う声に聞こえ、これ以上下はないというくらの惨めさを抱えたまま職場を後にした。

自分の崩壊寸前だった精神をようやく働こうと思えるくらいにまで回復させたのに、また同じようなことを繰り返そうとしていることに気がついた。

自分の精神の安定のために、これから働こうとしている職場は本当に相応しいのか？

確かに入って見なければ分からないことはある。

しかし明らかにまともでないと思像できる職種に自ら志願するのは、自殺したいと思われても仕方がないようにも思える。

ぼくはやっぱり目先の正社員という言葉に飛びつくよりも、地道に一から正社員の道を探していくことが、ぼくのような精神に深手を負った人間には最善のような気がする。

帰りのコンビニでまた求人誌を買ったぼくは、いつものようになんにもしていない人に見えるのだろう、という後悔もあったことは確かだった。

面接の合否を待っていた。ぼくの携帯が、別の不幸を告げてきた。

以前働いていた職場の部長さんが亡くなったことを、以前の職場でいろいろと優しくしてくれたパートの橋田さんから知らされた時、ぼくはてっきり面接の結果の知らせだとはかり思っていたので、しばらく理解できず、暢気な浮かれ調子で挨拶をしまい、橋田さんは事の重大さを分かっていたいなと思ったのか、口調を強めもう一度同じことを言った。

部長さんがどういった理由で亡くなったのかを訊ねても橋田さんとはにかく明日葬式があるからぼくにも来るようにとだけしか言わない。それで何か普通ではない死に方をしたのだろうか。ぼくは急に心臓が痛み出す感覚を覚えた。ストレスが極度に達するとよく起こる症状だった。

あの部長さんが、まさか誰かに殺されたなんてことは。いや、一番考えられるのは交通事故だろう。でも橋田さんの口ぶりからすると、事故を起こした相手が顔見知りとかだろうか。ぼくはいろんな状況で部長さんの死を想像し、やがてそれがいかに汚らわしい想像であるかに思い至ると、自己嫌悪の感情が頭いっぱいになり、ぼくのポジティブな思考を残らず砕いていく。こんな非常識なことを想像できるぼくは、どうしようもない人間だ。人の死で遊ぶような真似をするなんて、やっぱりぼくはまともではない。

それはそれとして葬式には一体どういう格好で行けばいいのか？ 就職活動に使っているスーツと靴でも構わないのだろうか？ ぼくは着信履歴から辿り橋田さんへ電話をして服装についての確認をし、香典の額についても橋田さんに決めてもらった額を用意するため、うちから一番近い銀行のATMで必要な金額を引き落としき

部長の葬式に行くにあたり気乗りしないことがあった。倉木さんと顔を合わせる事ができるほどにはまだぼくはあのことから吹っ切れてはいなかった。葬式なんだから黙ってお焼香を済ませ帰ってくればいいだけなのに、どうしても悪い想像をしてしまう。

葬儀場にはすでに橋田さんともう一人ぼくの知らないパートのおばちゃんが出て、社長と店長もいた。あんな形で辞めていった職場の連中と再び顔を合わせるのはいささか抵抗があったけど、ぼくはその集団には近づかないで、個人的に親しかった知人としての自分を演じることに決めた。

香典を渡し、親族だろっおばさんに倉木さんとの関係を訊かれ戸惑ったが、そこは素直に元部下だったとだけ答えると、相手のおばさんは必要以上に憂いの表情でぼくに来てくれてありがとうと頭を下げた。

ぼくの予想に反して葬儀場には人の出入りが多く、身を隠したいぼくには都合が良かった。

亡くなった部長さんには申し訳ないけど、これだけの人の中にいつまでもいることが苦しくて、ぼくは早く帰りたい自分を抑えることで精一杯だった。部長さんを偲ぶことを忘れ、襲いかかる対人恐怖の重たい感触に耐えるのに必死だった。気がかりだった焼香もいつの間にか終わらせ、葬儀場を出て行く一般の弔問客の後についてぼくも歩き出した。

ホールの奥に人ばかりがあつて、そちらに目を向けたら部長さんの子供達がいた。中学生の男の子は以前店に来たことがあったから覚えていた。寄り添うように立っている二人の女の子は高校生と小学生、部長さんに聞いていた二人の娘さんだろう。奥さんとは死別していると聞いていたから、この子達はこれからどうなるんだろうかと、なんとなく想像していた。

親戚に引き取られ、肩身の狭い日々を過ごし、弟と妹の為大学には行かず高卒で働き出す姉。両親を二人とも亡くし、精神的に不安定になり、自らを不幸にさらす妹、悪い連中と付き合い出す弟。

そんな安い想像しかできない自分にまた嫌気がさす。それからがさらにぼくの心根の卑しいところだ。

その三人をぼくが引き取り一人前に育てる、という自分かつこいいなストーリーを脳内で展開し、一人悦に入るのだ。自分の人生すらままならないぼくにどうして他人の子供を三人も背負える力があるというのか。第一ぼくが養子縁組を行える訳がない。現実には照らし合わせるが無理なことがすぐに分るのに、ぼくは自分の度を越えた夢癡に呆れ果ててしまう。他人の人生に目を向け、自分の問題から目を逸らす、いつもの逃避行動をまたやってしまった。自己嫌悪に感情が塞ぎ込み始める。

他人のことを考える時は、自分の中にある問題から目を逸らした
い時。

ぼくが自分自身に、教訓のように唱え続けていて、目まぐるしい世の中の変化に付いていこうと死に物狂いで生活している中で、いつの間にか忘れてしまっていた言葉が、今頭の中に突然浮かび上がってきた。ぼくは今度こそその教訓を忘れないよう、記憶の手前にしっかりと写し取るうと、何度もその言葉を繰り返し返していた。

何度面接を経験しても、自分のことを品定めしている面接官の目には慣れることはなく、ぼくは数え切れないほど、あの息苦しさを乗り越えてきたのに未だに成長していないことをひどく恥じていた。どうやれば人間性に良い変化がもたらされるのだろうか、というのが当面のぼくの課題の一つになっていた。

葬式からすでに三ヶ月が経っていて、あの時沸いてきた決意に乗っかるようにぼくはいろんな職種の面接を受けた結果、今ホームセンターの店員として働いている。まだ品出しがメインで指示されたことしかできないけど、以前のようにそれで自分を卑下したり、悲観的な考えに落ちないように自分に気を遣いながら、丁寧に毎日を生きていた。

それはとても神経を疲労させることだったけど、今現在のところぼくの精神状態はそう悪くはなかった。職場の人間関係も今のところ良好で、ぼくの周りにはみんな年上の主婦パートさんばかりだったから、みんなぼくによくしてくれ、ぼくの方でも同年代の子等よりも年上の方が気が楽だということもあって、仕事に行くのはそれほど苦にはならなかった。

どこへ行ってもそうだけど、やっぱりその仕事を長く続けられるかは人間関係に掛っていると実感する。この職場ならきつと長く続けられる、とぼくは仕事のことにも意欲的な態度を持てるようになってきた。前向きに生きているという手応えが最近のぼくにはあった。

そろそろぼくは凡人としての普通を手に入れる覚悟をしてもいい頃だと考え始めた。満足のいく幼少期ではなかったことからどうしても成功者としての未来ばかりを望んでしまうことは、余りにも自分の力量を弁えていないし、現実的でもない。どこかの会社の一社員としての人生を真剣に考えるべきだ。

ぼくは今度こそとハローワークへ向かうことを決めたが、やっぱり求人を見ているとどれも今ひとつという感想しか出てこない。時期が悪いといえそうなのだけど、どうしてもそこで働いている自分が想像できないのだ。まだ覚悟が足りないのかな。

ハローワークを出て、その日の午後一人で街に飲みに出かけることにした。人恋しくなったというのが本当のところなのだけど、本気で人生を歩むための景気づけという自分の中で名目立てをし焼き鳥屋へ入った。

何かの団体客が座敷を占めていて、ぼくはカウンターに座らされた。静かな店じゃなかったことでぼくは集団の中で自分の存在が消えていることに安心して飲み食いに集中することができた。対人恐怖とまではいかないけど、人気の多いところで過剰に緊張するぼくにとっては、これも訓練のうちだった。

座敷で飲んでいた客はどこかの劇団員らしく、その中で一人年の離れたおっさんがぼくに近づいてきて、演劇について語り始め、ぼくも酔っていたから普段よりも調子よくおっさんの話を聞いてあげていたら、どうやら気に入られたらしくおっさんに劇団の公演チケットをもらった。今週の金曜日にあるらしい。聞いたこともない会場だった。絶対行きますと適当な返事をしてぼくは意気揚々と店を出た。

知らない人とこんなにも上機嫌に話ができる自分が、まだ捨てたものじゃないと思えるほど、自分自身を好きになれそうな夜だった。

10 (後書き)

誠に勝手ながら一旦ここで終了させていただきます。
次は来年あたりの再開を考えています。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8556k/>

ぼくの不満

2011年7月26日03時19分発行